
電腦世界

エルム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳世界

【Nコード】

N5675B

【作者名】

エルム

【あらすじ】

パソコン画面を通じて男女の出逢いを描いたショートストーリー。実際逢った事の無い男女に恋愛感情は芽生えるのか？そして結末は……？現代社会の一端を垣間見る、ちょっと切ない物語の開演です。【この物語は、「FC2小説」にて、わたくしが執筆掲載したものに加筆・修正したものです】

電脳世界（1）（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する人物・地名・名称等は全て創作で、
実在するものとは一切関係ありません。

電腦世界（1）

< 1 >

「ピロリロリンっ」

パソコンが二十二時を告げるチャイムを鳴らすと、宏は慌ててネットサーフィンを切り上げ、お気に入り登録してあるチャットサイトを急いでクリックする。

「今日も来ているかな……」

期待半分のまま「夜の部屋」と名付けられたチャットルームへ入る。

ここはパスワードを入力しないと入れないシークレットルームなのだ。

画面を見ると『雅美』という名が既に表示されている。

（いたっ！）

宏は高まる鼓動を抑えつつ、いつも通り挨拶から入る。

『こんばんは』

『こんばんは。時間通りですね』

今日の彼女は続けてこう打って来た。

『貴方が来るのを待っていました』

その一文を目にした瞬間、宏の心臓がドクンと脈打ち、心拍数が一気に急上昇する。

（彼女がオレの事を待っていてくれた！？）

ブラインドタッチの出来無い宏は震える指先と画面を交互に見ながら、たどたどしく、しかし真剣にキーを打ってゆく。

『待たせてごめん。私も貴女に会いたかった』

宏は興奮と昂ぶりから思わず告白にも等しい言葉を綴ってしまう。

今まで生きてきた二十八年間、女性に向かって初めて言った言葉だった。

『待っている時間も楽しいから気にしないで』

雅美は思わせ振りの言葉を出したかと思うと、何事も無かったかのように次々と言葉を重ねて来る。

『今日、職場でね……』

雅美の打ち出す文字が画面を下から上に向かって徐々に埋めてゆく。

宏は相変わらずマイペースな女性ひとだな、と思いつつ画面に向かって相槌を打ち、キーを叩く。

『それは大変だったね』

ところがリロードと遅い打ち込みによって会話とずれた行に宏の言葉が表示されてしまう。

しかし、それはいつもの事なので二人は構わずに会話を続ける。

『——なんだけど、どう思います?』

『なるほど。そんな時は——』

雅美が発言し、宏がそれについて考えを述べる。

二人の会話はいつもそんな風にして進んでゆくのだった。

ひとしきり今日の出来事や明日の予定を報告し合うつと、雅美が改めて聞いて来た。

『今夜は貴方に聞いて貰いたい事があります。時間は大丈夫ですか?』

雅美の言葉がここで一旦止まる。

宏が返事を打ち込むのをちゃんと待っていてくれるのだ。いつに無い雰囲気を感じ取った宏は一言だけ打ち込んだ。

『OK』

暫くの間があつたあと、画面には信じられない言葉が表示された。

『最初に貴方の言葉を聞いた時から、私は貴方を好きになりました』

宏は脳天に電撃を食らったかの様な衝撃を受けた。

< 2 >

宏は女性に告白された嬉しさと同時に頭の中に大量のクエスチョンマークが泳ぎ出す。

（雅美がオレの事を好き！？ そんな……初めて会ってからまだひと月も経って無いぜ）

宏は頭の中で浮かんでいる疑問点を雅美にぶつける。

『ありがとう』でも、私が最初に雅美に掛けた言葉とは？ 生憎覚えてないので教えて貰える？』

ちょっと間が開いた後、雅美からの言葉が画面に並び始める。

宏は一字一句逃さぬ様に目を凝らした。

『宏さんは最初に会った日に、私にこう言いました』

『例え今は一人でも、画面の向こう側にはオレ達がいる。誰かしらパソコンの前に座っている人がいる。だから貴女は寂しく感じる必要は無いよ、と』

宏は画面を見つめながら記憶の糸を必死に手繰り寄せ、雅美と出会った頃の会話を思い起こす。

（これは……たぶんあの時の……）

宏の記憶は数週間前まで遡る。

『——という話さ>鳥海^{ぢゅうかい}』

『それはまた、難儀な（笑）>隼^{はやぶさ}さん』

『あははは（爆）>オール』

宏は「鳥海」と言うHN（ハンドルネーム）を使い、「隼」、
北斗^{ほくと}」と名乗る常連さん二人と誰でも参加出来るオープンルームで
会話を楽しんでいた。

そこへ「雲雀^{ひばり}」と名乗る人がログインして来た。
その人は挨拶もせずに、いきなり切り出して来た。

『恋愛についてどう思いますか』

この一文が画面に表示された瞬間、それまでの楽しい空気から重
苦しい空気に一転してしまう。

北斗は早々に「お休み」と言い残してログアウトしてしまい、
残された宏と隼は来たばかりの雲雀を無視して落ちる訳にもいかず、
何とか会話を続ける努力をした。

『はじめまして。私は鳥海（ちょうかい）と言います。宜しく。>
雲雀さん』

『俺は隼。はやぶさ、と呼んでくれ。よろしく>雲雀』

チャットを荒らす「荒らし」なら、この後の会話は続かない。
しかし雲雀と名乗る人はきちんと挨拶を返し、会話に加わって来た。

どうやら荒らしでは無いと判ると、宏と隼は何とかペースを取り戻し、雲雀にお決まりの問い掛けする。

『どちらにお住まいですか？』

『出来れば歳を教えて（笑）』

などなど、一通り挨拶を交わした所で雲雀が再び問い掛けて来る。

『男性は恋愛についてどう思っていますか』

『男性は恋愛を面倒だと思いますか』

今までの会話で我々が男だと判ったのだろう、雲雀は続け様に問い掛けて来る。

宏は内心困り果ててしまう。

どう見ても場違いな会話だ。

誰が見ているかも判らないオープンなチャットで、おおっぴらに話せる内容とは到底思えない。

『あ、電話だ。ごめん、今日はこれで落ちるわ。ほな、またな』

ここまで辛抱強く付き合ってくれた隼も、これ以上の面倒はごめんとばかり、明らかに嘘だと判る理由を付けて撤収してしまう。

宏は無理も無いな、と画面の前で深い溜息を吐く。

（こんな内容、誰もしたく無いよね。雲雀って人、状況判ってんのかな？）

雲雀の独善的な態度に腹が立ったものの、このまま放つては置けない気がした。

面倒臭さも半分あるが、公のチャットでこんな事を聞いて来る雲雀に感じる物があったのだ。

（時間もまだあるし、とことん付き合ってみるか）

宏は雲雀との会話を続ける事にした。

早速メンバー同士のメッセージを交換する「連絡箱」の使い方を教え、そこでシークレットルームのパスワードを伝える。

人目に付かず、邪魔も入らないこの部屋なら突っ込んだ事も聞けるからだ。

『それじゃ、五分後に』

宏と雲雀は一旦オープンルームから落ち、「夜の部屋」へとログインし直す。

『あのね、実は私……』

これまでの会話から、彼女は東京に住んでいる事、宏より五つ年下の二十三歳である事、保育士を目指して夜は勉強し、昼はその為の費用をバイトで稼いでいる事、軽度の鬱病である事などが判った。

そして気分が高まったのだろう、最近男に振られたのだと告白して来た。

『私、何だか寂しくなって、それでこのチャットルームに来たの』

宏は全身から力が抜けてゆくのが判った。

（恋愛について、なんて大仰な言葉を使うから何だかと思えば、結局は寂しいからここへ来ただけじゃんか。……ったく、もって回った言い方してからに）

画面の前で脱力した宏は一気に眠気が襲って来た。

パソコンの時計は既に二十五時を過ぎている。

宏は振られたばかりの女の子を勇気付ける為に、誰でも言うだろうと思われる言葉を最後に打った。

『大丈夫♪ 例え今は一人でも、画面の向こう側にはオレ達がいる。誰かしらパソコンの前に座っている人がいる。だから貴女は寂しく感じる必要は無いよ♪』

宏は続けてこう打った。

『いつでも話し相手になるからさ♪』

『……ありがとう』

（そう言えば、そんな事言っただけ……）

宏は全てを思い出し、告白された一行を見つめる。

雅美とチャットを通じての付き合いが深まった瞬間だった。

< 3 >

宏と雅美が最初に出会ってから、二人は毎日同じ時間に「夜の部屋」でチャットをする知人になっていた。

季節ネタや時事ネタ、雅美の職場の話題などで盛り上がる二人の距離は徐々に親しい人へと変化してゆく。

『宏へ。今日は夜学があるので会話できません。明日、会いましょう』

『雅美へ。今日はいつもより三十分遅い二十二時三十分には部屋へ行きます』

二人の意気は投合し、HNから本名で呼び合う仲となるまで多くの時間を必要としなかった。

『あのね宏、会社のお局が私に意地悪するの……』

『女の子を苛めるのがお局の仕事だよ』

今日一日の出来事を雅美が話し、宏がなだめるというパターンが出来上がったのもこの頃だ。

そんなやり取りが続いたある日。

『……私は貴方が好きです』

『貴方の言葉を見た瞬間、私は救われたんです』

宏は雅美から告白された。

しかし単純に嬉しくはあるものの、素直に喜べない自分もいた。

（チャットで数週間会話しただけで、会った事も無い人を好きになれるものなのか？ ついこの間、名前を知ったばかりだぜ！？）

——人恋しさ、リップサービス——

そんな言葉が頭を過ぎり、宏は雅美の求愛を保留と言う形で置いた。

雅美の事は嫌いでは無いし、今では大っぴらにHネタも話す仲だ。

会っている時間は確かに楽しいし、心も弾む。

だからと言って「オレも好きだ」とはどうしても言えなかった。

（そりゃ、オフ会を重ねてなら恋愛感情が芽生える事だってあるだろうけどさ）

宏が使っているチャットサイトでは先日、ここで出逢ったカップルが何度もオフ会で顔を合わせて遂には結婚した、と掲示板に載っていたのを宏は目にしていた。

しかし、付き合い始めたものの画面の中の印象と現実の本人とのギャップに別れるカップルが圧倒的に多い事も知っていた。

そして何より、逢った事も喋った事も無いのだ。

二人を繋ぐ物は目の前のパソコン画面だけ。

画面に打ち出される文字に対して応えるだけの繋がり――。
そんな事もあり、心の隅で雅美の感情を素直に信じられない部分
があったのだ。

――親友以上恋人未満――

これが宏の取ったポジションだった。

雅美はそんな宏を責めるでもなく、これまで通りに接して来た。
何時もの時間に何時もの部屋で落ち合い、日付が変わる前に落ち
る。

二人はほぼ毎日、何かしらの会話を重ねた。
ところがそんなある日。

『明日は親類の家に泊まるので、雅美と会う事が出来無いんだ』

『親類？　どんな関係？』

『兄貴の嫁さんの実家。そこでみんなで宴会をするんだって』

『そこって、前に言ってた所？　妹さんもいる所ね？』

宏は以前、自分には兄がいて、兄嫁には二年前に離婚し、三歳に
なる子供を持つ妹が両親と住んでいると話した事があった。

『そうだよ。妹さんはそこに住んでるからね』

『その妹さんと結婚するの？』

『……はいっ！？』

『その妹さんと結婚するから宴会するんでしょ？』

『チヨツと待て。何でそうなる？ 俺は結婚なんてしないよ』

『その妹さんが好きなんですよ？ だから兄嫁の実家に行くんですよ？』

宏は「またか……」と画面を見つつ頭を抱える。

雅美には妄想癖、と言うか激しい思い込みをする傾向があるのだ。

それも悪い方向に。

例えばこんな事もあった。

『宏、どうして他の人と話してるの？』

『？？ どうして、って…… 雅美が話しても構わない、って言ったんだよ？』

『私との会話に飽きたの？』

『飽きるわけないよ。飽きないからこうして話しているんだよ？』

『私に飽きたから、他の人と会話してるんですよ』

宏は雅美と出逢ってから、チャットサイトで知り合った知人達と「オープンルーム」で会話を続けていた。

雅美と落ち合う迄の時間と雅美が就寝で落ちた後、宏は常連さんとのチャットを楽しんでいたのだ。

そんな宏に、雅美はこう言った。

『これまでの付き合いもあるだろうから、空いている時間は自由にチャットを楽しんで』

だのに、雅美はログ（チャット画面）を見て宏に問い質して来たのだ。

まるで自分が告げた事を綺麗に忘れたかの様に。

『だからさ——』

この時宏は二時間掛けて何とか雅美をなだめ、思い込みを解かせたのだった。

今回もその悪い癖が出たのだ。

「激しい思い込み」

人の話を聴かずに自分で話を作り、悪い方向へと考える雅美の性格が次第に表面化し、宏は微かな不安を覚えた。

（つづく）

電脳世界（2）（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する人物・名称等は全て創作で、実在するものとは一切関係ありません。

電脳世界（2）

< 1 >

宏は雅美の性格に一部引つ掛かる点はあつたものの、これまで通り何時もの時間に何時もの部屋でチャットを続けた。

——人間、誰しも欠点を持っている——

そんな常識を判り切っている社会人の宏にとって、雅美の思い込みは他の人よりも度が過ぎる程度で、だからと言ってどうと言う事は無い、と雅美との付き合いを止めるまでは考えていなかった。

（思い込みはその都度、オレが正せば済む事だし）

そんな思いもあつたし、無数にあるチャットサイトの中で偶然出逢つた仲なのだ。

一期一会を大切にする宏にとって、性格の一部が悪いからと言って付き合いを止める様な真似はしたく無かった。

『……それじゃ、そろそろ寝る時間だから落ちるわ。おやすみ。楽しかった』

『了解♪ おやすみ♪。 好い夢を♪』

雅美との二人っきりの会話が更に数週間続くと、宏にも情が湧いて来るのはある意味当然かもしれなかった。

そんなある日、雅美が目茶苦茶落ち込んで「夜の部屋」にログイン

ンして来た。

『……今日、お局に意地悪されて叱られ、上司からも注意されたの』
詳細を聞き、可哀想に思った宏は雅美に対してキーを叩いた。

『〇九〇-××××-。これがオレの携帯だよ。今日みたいに寂しくなったら掛けて好いよ』

雅美を可愛く思い始めていた宏は自分の携帯電話のナンバーを雅美に教えたのだ。

宏の言う言葉に、誤字が多いながらもちゃんと返事を返す雅美。
宏が来る時間前から、部屋で待っている雅美。

何時も宏を頼りにしてくれる雅美。

そんな雅美に文字からでは無く、声で安心感を与えたかったのだ。

「ちゃらんらら〜」 ちゃらちゃら〜」

宏がパソコンに打ち込んで暫くしてから、携帯の着信音が鳴り始めた。
携帯の画面表示を見ると、「非通知着信」となっている。

（まさか……ね）

宏の鼓動が早まり、何時もは無視する非通知着信の電話に指を掛ける。

「……はい」

上擦りそうな声を何とか抑え、宏は電話に出た。
果たして、電話の向こうから聞こえた声は女性のそれだった。

「あ……あの、雅美、です」

宏と雅美が初めて肉声で会話した瞬間だった。

< 2 >

雅美は宏に好きだと言った。
だのに自分の住んでいる場所について教え様とはしなかった。

『宏の家の、最寄り駅ってどこ？』

『○×線の ■駅だよ。雅美の最寄り駅は何処？』

『あのね、明日、夜学なの。だからここに来れないかもしれないわ』

またある時は、

『宏の住んでいる所って、どんな所？』

『×●市の外れだよ。山も海も近い所。雅美は東京のどの辺に住んでいるの？』

『それじゃ、そろそろ寝る時間だから、落ちるわね。……おやすみ』

何故か居住に関する情報は決して教えないのだ。

——自分の手懸りとなる情報は言わない——

チャットの世界ではそれが当たり前とは言え、雅美は自分の最寄り駅は勿論、住んでいる地域や区名すら教え様とはしなかった。

（ここは誰も見ていないんだから、教えてくれても良いのに……）

宏は寂しく思ったものの相手は女性だし、会った事も無い男に教えなくても当然かと、これ以上聞く事を諦めた。

しつこく訊ねて言い合いになってもつまらない、と考えたのだ。それに、何処に住んでいても雅美は雅美だし、という思いもあった。

（雅美はどこか子供っぽい所があるし、細かい事は気にしちゃうかな）

宏はいつしか年上ならではの包容力で雅美と接していた。

そんなある日、二人の関係を揺るがすアイテムが加わった。それまではいつもの時間、いつもの場所でチャットを交わすだけだった。

『こんばんは、宏』

『雅美は今日も早いね』

二人を繋ぐものはパソコン。

今まではパソコン画面に打ち出される文字が唯一、相手の存在だった。

そこへ携帯電話が加わったのだ。

「もしもし、宏……」

「どうした？ 話してみな」

宏が自分の携帯番号を教えた事により直接相手の声を聞き、会話するという新たな繋がりとなった。

「宏、何だか眠れないの。少しでも良いから話を聞いてくれる？」

「宏の声を聞きながら眠りたいの。何でも良いから声を聞かせて」

深夜〇時過ぎに掛かって来た電話に出ると、雅美が甘えて来た。

宏は純粹に可愛いと思う。

「あのね、お局が……。どう思う？」

「社長とお局が結託してるの。どうしよう……」

十五時過ぎに掛かって来た電話に出ると、開口一番泣き付いて来た。

よくよく聞くと今は休憩時間で、隠れて電話しているのだと言う。

宏は苦笑しつつ、なだめに掛かる。

雅美から電話が掛かる度に宏は相槌を打つ。

『おはよう♪ 今日は好い事あると好いね♪』

『お疲れ様♪ 一日頑張ったね♪』

宏の携帯電話はメール機能が付いていない。

そこで唯一教えてくれた雅美の携帯メールアドレスにパソコンからメールを送って励ます事も、いつの間にか宏の日課になっていた。

ところが。

「宏、今日の昼間、電話に出なかったでしょう。どうして無視するの？」

「昼間の電話……十一時頃の？ ん、その時は車の運転中だったよ」

「嘘っ。私だと知ってて無視したのよっ」

「本当だっつー！」

またある時は。

「さっき電話したら出なかった。どこに行ってたの!？」

「十九時過ぎの電話の事？ その時は夕食を摂ってたよ」

「どうして出てくれないのっ!？ 私からだと知ってるでしょうっ

！」

「夕食中でも携帯を持ち歩けて言うの？ 自分の家の中なのに？」

激しい思い込み。

雅美の悪い癖が電話口でも展開され始めたのだ。

宏がトイレや風呂、食事など、何かしらの都合で電話に出られないと「無視している」と責めるのだ。

「電話に出られない時もあるから、携帯の番号教えてよ。折り返しこつちから掛けるから。そうすれば何の問題も無いでしょ？」

宏が当然の如く切り返すと、途端に雅美の口は重くなる。

何かと理由を付け、幾ら宏が尋ねても決して自分の携帯番号を教え様とはしないのだ。

「私から掛ければ宏に携帯料金掛からないでしょ」

「ほら、私、夜学に通っているから、その時は電話に出られないし」

余りに見え見えの嘘に如何した物かと宏は頭を抱えてしまう。

（人の事を責めるくせに、自分は出なくて良いなんて……。第一、好きな相手には自分の事を知って欲しいと思うものじゃないのか？）

恋人未満とはいえ雅美に愛着を感じていた宏にとって、頑なに口を閉ざす雅美の気持ち判らなくなる。

（俺を好きだと言ったのは……何だったんだ？）

宏は雅美との距離が徐々に拡がり始めたと感じた。

< 3 >

宏は次第に雅美との会話が億劫になって来た。

雅美の間違った思い込みが何時、何をきっかけに炸裂するのかわかると以前の様に会話を楽しむ、というスタンスにはどうしてもなれないのだ。

（それでも、何となく切り離せないんだよね）

宏は雅美の宏に対する気持ちからいずれは良くなる、改善されるかも、という期待を持っていたし、信じてもいた。

欠点に目を瞑れば普通の女の子なのだ。

（俺の言葉を信じてくれれば、きっと間違った思い込みも無くなる筈……）

そんな思いもあつて宏は雅美との付き合いを続けた。

『……それじゃ宏、時間だからもう寝るね。おやすみ』

『了解。おやすみ。好い夢を』

いつもの様に二十三時丁度に就寝の挨拶を交わし、二人のチャットが終わる。

宏は雅美相手でも、オープンルームで他の人と会話する時も、いつも会話の終わりは「好い夢を」で締めていた。

チャットルームでは就寝落ちが二十三丁二十四時台と言う事もあり、丁度好い挨拶だと宏は気に入る、好んで使っていた。

その締め言葉が自分を苦しめる原因になるとは、この時の宏には想像も出来無かった。

ある日、雅美とのチャットが終わり、そろそろ日付も変わろうかという時に雅美から電話が掛かって来た。

「宏、貴方『吾妻』^{あづま}という名前を使ってチャットしてるでしょう。どうしてそんな事するのっ!？」

最初、宏は雅美が何を言っているのか判らなかった。
なので頭を捻りながら聞き直した。

「はい~~~~っ? あずま……? 俺があずま? どう言う事?」

「しらはつくれないでっ! 私とチャットしている間にも、『みんなの部屋』で『吾妻』って名前でチャットしてたでしょっ! 判ってるのよっ!」

雅美は今までに無い勢いで怒りを顕にしている。

宏は「みんなの部屋……あずま……」と呟き、ハタと気付く。

「ああっ♪ 『みんなの部屋の吾妻さん』だろ? 知ってるよ。俺

も話した事あるもん」

宏は雅美の都合で彼女と会話出来無かった日に、『みんなの部屋』の常連さんである『吾妻』と何度か会話をした事があった。

雅美はその吾妻が宏ではないかと疑っているのだった。

「どうしてよっ！ 私との会話がつまらないからって他の部屋で同時にチャットなんかしてっ！ バカにしないでっ！！」

余りに一方的に言われた宏も流石に黙ってはいられなかった。
努めて冷静に声を掛ける。

「それは誤解だよ。俺は『吾妻』じゃない。それに、雅美と同時に他の部屋でチャットなんて俺の遅いキータッチじゃ出来無いよ」

「嘘っ！ どうして騙すのっ！ 正直に自分は『吾妻』だって認めなさいよっ！」

「騙して無いよ。雅美、どうして『吾妻』が俺だと判断したの？ それを教えて」

「同じ地域に住んでる。締め言葉も同じ。口調も同じ。そんな偶然ある訳ないっ！」

宏はその場にうずくまると頭を抱え、盛大な溜息を吐いた。
始まったのだ。

雅美の激しい思い込みが。

しかも今回は状況が似ていると言うだけで宏自身を疑っている。

「あのさ、良く聴いて。彼は確かに同じ県の同じ地域に住んでるけ

ど、俺じゃ無い。締め言葉も俺以外にも使ってる人はたくさんいるし、チャットではみんな同じ様に丁寧な口調になるでしょ？」

「どうして私を騙す様な事するのっ！ 私が嫌いなら嫌いって言え
ばいいじゃないっ！！」

雅美は電話口で感情をぶちまける。

宏にはその口調は怒っている様にも、泣いている様にも聞こえた。

「俺は雅美を騙す理由が無いし、嫌いでも無い。どうして俺の言葉
が信じられないの？」

「私が他の人とチャットしてもいい、って言った事への当て付け？
そんな真似しないでっ！ 早く『吾妻』だと認めなさいよっ！！」

「そんなに疑うなら、ログ画面でソース表示して俺と『吾妻』のI
Dを確認してよ。そうすれば俺と『吾妻』は別人だっって判るから」

「そんな事しなくても判るわっ！、『よい夢を』なんて素敵な言葉、
宏しか使わないじゃないっ！ そんな偶然なんて無いっ！！」

宏の言葉を聞かず、自分の思い込みと感情に任せて宏を罵る雅美。

そこには宏に愛を囁いた女の影は微塵も無かった。

「私の友達が言ってた。同じ人が別の名前を使って同時にチャット
する事が良くあるって。だから宏もそうしてたんでしょ？」

懐柔するかの様に口調を和らげて話す雅美に、流石の宏も頭に来た。

雅美より年上という意識も忘れ、一人の男として雅美に正対する。

「……俺の言葉より友人の言葉を信じるんだ、雅美は」

今までよりも一段低い声で話す宏。

宏は怒りが高まると無口になり、声もずっと低くなる。
これまで雅美には取らなかった態度だ。

「そうよっ！ 大切な友人だものっ！」

「……好きな人の言葉より、友人の言葉を信じるんだね、雅美は」

「……は、早く認めたらっ！？ 自分は『吾妻』だって」

初めて動揺を見せた雅美だが、考えは変えていなかった。

宏はここに来て、自分の中から雅美への愛着その他諸々の想いが霧散してゆくを感じた。

「……何度でも言う。俺は、『吾妻』ではない」

更に低い声で告げる。

「……雅美は俺が『吾妻』だと思っているんだね、今でも」

「そうよっ！ でないと説明付かないわっ！！」

「……何の説明？」

「住んでる地域とか、口調とか、台詞とか。落ちるタイミングも！」

「……タイミング？」

「宏は私との会話が終わった後、向こうの部屋でも落ちるでしょっ」

宏と雅美の会話が終わるのが二十三時、『吾妻』も時を前後して落ちるのと言う。

「……俺は彼と話した事あるから知っている。彼は時間を決めてチャットを楽しんでいる。毎日二十二時からの一時間だ」

「そんなの、貴方だから知ってて当然でしょ！？ 自作自演しないでっ！」

「……………」

宏には返す言葉が最早見つからなかった。

何をどう言っても、この思い込みは翻らないだろう。

雅美は黙り込んだ宏に向かって尚も言い募る。

「図星指されたからって無視しないでっ！ いい加減認めなさいよっ……」

一期一会を大切にする宏にとって、雅美と出逢ってから今までの時間は何だったのだろうかと哀しくなった。

（喧嘩別れする為に……俺達は出逢ったのだろうか……）

電話口では尚も雅美が何か言っている。

宏は構わずに口を挟む。

「……雅美は今でも自分の考えを信じてるの？」

「そうよっ！」

「……好きだと言った相手の言葉より、自分の心を信じたんだね」

宏は最後まで言いたくなかった言葉を口にせざるを得なかった。
しかし。

「……そ、そうよっ、自分を信じて何が悪いの？ 私を騙した貴方に言われたく無いわっ！」

好きな人の言葉を疑い、傍にいる友人の言葉や自分の心だけを信ずる女に、果たして恋など出来るものだろうか。

宏の中で雅美との繋がりゝ縁ゝが切れた瞬間だった。

そして雅美と出逢った時に彼女が言っていた言葉を思い出す。

『私、彼から振られたの……』

（激しく間違った思い込みを恋人に対してぶつければ、振られて当然かも）

宏は大きく息を吐くと、努めて冷静に雅美に告げた。

「……もう電話を掛けて来ないで。俺もメールしないから」

電話の向こうで雅美が息を呑むのが伝わって来る。

宏は続け様に言葉を重ねた。

「……二度と俺に電話しないで。……………さよなら」

宏は携帯の通話終了ボタンを自分から押した。

これまでチャットや電話では『またね』と雅美から終わらせていた会話だったが、初めて雅美に対して『さよなら』を使い、自分から会話を終了させたのだ。

（これで……好かったんだ）

そう思った矢先、携帯が鳴った。

一瞬迷ったが、携帯に手を伸ばした。

「……はい」

「宏！？　嘘よね！？　『さよなら』なんて、嘘よねっ！？」

そこにはさつきとは打って変わって弱々しく声を震わせる雅美がいた。

今までの怒り、罵倒した雅美は何処へいったのだろうか。

「……嘘じゃ無い。人を……好きな人を信じられない女性ひととこれ以上付き合う事は出来無い。だから『さよなら』と言った」

「そっ、そんなっ！　私、宏と別れたく無いっ！　今でも好きなのっ！……」

「……だったら、俺が『吾妻』では無い……と信じる事が出来る？」

「それは……出来無いわ。私は今でも宏が『吾妻』だと思っているもの。これは多分……これからもずっと変わらないわ」

ここまで思い込む雅美に宏は絶望した。

雅美に対して期待した思いも何もかもが全て崩れ去ってしまった。

宏はゆっくりと大きく息を吸い、一語一語区切る様に、はっきりと告げた。

「……二度と、俺に電話しないでっ。これでさよならだっ」

雅美は何も言って来ない。

宏は最後に嘘偽りの無い言葉を穏やかに付け加えた。

「……今まで楽しかったよ。雅美のお陰で充実した時間を過ごせた。……ありがとう。貴女に出逢えて良かったと思う」

しかし。

「嫌味を言わないでっ！ 何よっ！ 私を騙したくせにっ……」

耳から携帯を離すと、雅美の怒鳴り散らす声が遠くから聞こえて来る。

宏は黙ったまま液晶画面を見つめる。

そこには「非通知着信中」と言う文字がいつまでも浮かんでは消えるを繰り返していた。

まるでチャット世界の住人の様に。

「……出会いと別れ、か」

宏は携帯をベッドに放り投げ、そのまま仰向けに倒れ込む。
するとパソコンの時計が午前二時を告げた。

（こんな時間……か。そういえば雅美と出逢って……）

壁に掛かったカレンダーを見ると、丁度四ヶ月が過ぎている。
そして今日の日付の所には七夕の文字が赤く、小さく踊っていた。

（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5675b/>

電脳世界

2011年9月9日03時53分発行